

幼稚園教員養成カリキュラムにおける「表現」の内容検討 (2)

多賀秀紀 千田恭子

幼稚園教員養成カリキュラムにおける「表現」の内容検討 (2)

多賀秀紀¹ 千田恭子¹

A Study of “Expression” in the Kindergarten Teacher Training Curriculum (2)

Hidenori TAGA Kyoko SENDA

概要

本稿では、2017（平成29）年に保育教諭養成課程研究会が公表した「幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラム」のうち、「幼児と表現」に示された「(2) 様々な表現における基礎的な内容」に関連する研究動向を、2016（平成28）年から2019（平成31・令和元）年に刊行された文献を対象として収集し、講義内容を音楽表現の視点から検討するための基礎的資料の提供を目指した。その結果、保育者が獲得すべき具体的な資質能力として、①幼児期の心身の発達段階と音楽の本質的な特徴を正しく理解し、それらが幼児の成長に与える影響を（専門的に）考察する力。②幼児の遊びの中から新幼稚園教育要領に示された5領域の関連を見出し、実際の遊びへ展開させ保育環境を構築できる能力。以上2点の重要性が示唆された。これらを育てるためには、表現することの楽しさを学生自身が実感しつつ音楽、造形、身体、言語の各表現分野を学び、その特性や位置づけを理解することによって学生自身の感性を豊かにし、表現力を向上させる講義内容を組織することが重要である。

キーワード：幼児教育、幼稚園教諭養成課程、領域「表現」

Keywords：Education for Infants, Kindergarten teacher training course, Expression

1. はじめに

本稿は、これからの幼稚園教諭に必要とされる資質能力の育成に関連した研究動向を整理したものである。

2017（平成29）年に保育教諭養成課程研究会が公表した「幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラム」（以下、モデルカリキュラム）では、その作成意図について「幼稚園教諭を目指す養成課程の学生においては、幼児を理解する力を身につけることが重要であり、その力をベースにして、幼稚園教諭として必要な資質能力を身に付けることが大切である」と説明している（保育教諭養成課程研究会 2017, p.3）。本稿の検討する「領域に関する専門的事項」としての「幼児と表現」のモデルカリキュラムには、「(1) 幼児の感性と表現」「(2) 様々な表現における基礎的な内容」の2つのカテゴリーそれぞれに「一般目標」および「到達目標」の階層構造化された目標が設定されている。よって、これらの目標の達成が、「幼稚園教諭として必要な資質能力」の獲得に不可欠となる。

「(1) 幼児の感性と表現」については、多賀・千田（2020）が幼稚園教諭養成課程カリキュラムにおける講義内容の検討を、音楽表現の視点から試みている。本稿では「(2) 様々な表現における基礎的な内容」について、同様に音楽表現の視点から関連する研究動向を収集して整理し、同じく講義内容を検討するための基礎的資料としての提

供を目指す。なお、本研究の遂行に際しては、モデルカリキュラムが公表された2016（平成28）年から本稿執筆の直前となる2019（平成31・令和元）年に刊行された文献を収集の対象とした。

本稿の執筆は、1・2・3・4を多賀が、5・6・7・8を千田がそれぞれ担当し、全体の構成は両者の議論による。

2. 幼稚園教育要領・モデルカリキュラム

まず、本稿が検討する「(2) 様々な表現における基礎的な内容」に示された「一般目標」および「到達目標」を確認しておきたい。

【一般目標】

身体・造形・音楽表現などの様々な表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする。

【到達目標】

- 1) 様々な表現を感じる、みる・聴く・楽しむことを通してイメージを豊かにすることができる。
- 2) 身の回りのものを身体の諸感覚で捉え、素材の特性を生かした表現ができる。
- 3) 表現することの楽しさを実感するとともに、楽しさを生み出す要因について分析することができる。

¹ 富山大学人間発達科学部

4) 協働して表現することを通し、他者の表現を受け止め共感し、より豊かな表現につなげていくことができる。

5) 様々な表現の基礎的な知識技能を生かし、幼児の表現活動に展開させることができる。

(保育教諭養成課程研究会 2017, p.19 下線は筆者)

先述の通り、モデルカリキュラムの示す「幼稚園教諭として必要な資質能力」を学生に獲得させるため、これらの目標の達成が求められることになる。「一般目標」に示された「感性」は、表現における外的要因や媒体との相互作用において重要な役割を果たす(多賀・千田 2020, p.22)。そのため、学生には「幼児の表現を支える」ために「感性を豊かにする」ことが求められることになる。また「到達目標」については、各目標の末尾が「できる」と結ばれていることから分かるように、学生が獲得することを期待される具体的な能力が示されている。ただし、モデルカリキュラムでは、「幼稚園教諭として不易とされる資質能力」を「5領域の教育内容に関する専門知識」、そして「幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力」「様々な教材を必要に応じて工夫する力等」(以上、下線は筆者)として、「5領域に示す教育内容を指導するために必要な力」と規定している(保育教諭養成課程研究会 2017, p.4)。したがって、学生が獲得を期待されているこれらの能力は、単に「イメージを豊か」にしたり、「表現ができる」ようになったりするのみならず、目標5)にあるような実践レベルにおける活動の展開に資するためのものでなくてはならない。

以上を踏まえ、次章以降では5つの到達目標ごとに先行研究のレビューを試みる。

3. 「イメージを豊かにすることができる」

音楽表現において、「イメージ」の存在が重視されていることは論をまたない。一方で小池(2013)は「表現や音楽の教育において重要だとされている子どものイメージが、実際にはその内容を十分に吟味されないままである」可能性を指摘している(p.14)。このことは、指導者の立場に対しても同様の問題を投げかけている。すなわち、指導者のイメージとそれを「豊かにする」ということの意味を問う必要があるということである。

和田ら(2016)は、指導者が「幼児の持っているイメージがどのように遊びの中に表現されているかを理解し、そのイメージの世界を広げ、十分に楽しむことができるよう素材を用意することが大切」と主張している(p.167)。この背景には、読譜力やピアノ演奏の技能を身につけるにとどまり、子どもたちに伝わる表現力や、音楽に対する感性を十分に備えないまま保育現場へ出ていくことに対する和田らの危惧がある(同)。また平尾・

滝沢(2019)は、指導者が幼児の表出や表現を援助するに当たって、「必要最低限の音楽技術や知識の上に立った、自由な発想力が必要であり、表現領域における造形、身体表現等との横断的な繋がりを音や音楽からイメージすることのできる応用力を兼ね備えていることが重要である」としている(p.78)。このことは、学生が「イメージを豊かにすること」によって音楽に限定されない「表現」の在り方を関連的に把握することの重要性を述べたものといえる。

学生が「イメージを豊かにする」ことには、自身の演奏技能や表現力の向上はもとより、それらを通して幼児のもつイメージの広がりや追体験する上で欠かせない役割があることが示唆されよう。ただし、和田らの指摘するように、読譜や演奏がピアノ学習初心者にとって多大なストレスとなることも事実である(和田ら 2016, p.155)。したがって、ピアノ演奏に限定することなく多様な音楽や楽器に触れることで、学生のイメージを豊かにすることも検討される必要がある。

4. 「表現ができる」

学生の「表現力」を向上させようとする試みについては、先行研究や事例報告の多くがピアノ演奏の習得を目指している。石田・橋本(2018)は、旋律、リズムとともに、西洋音楽における「音楽の三要素」の一つとされる「和音」の扱いについて、ブルグミュラー(Burgmüller. J 1806-1874)による《25の練習曲》を用い、強弱の変化や音楽の仕組みと合わせて学生の理解を深める実践を試みている。

また前田(2018)においては、技術的内容の習得と音楽的な表現の往還によって、音楽的表現の豊かな演奏ができるようになることが目指されている。具体的には、学生の演奏が音楽的表現を欠いているとピアノ指導者が判断した場合、該当の箇所を学生に歌わせた後に再度ピアノで弾かせることを試みている(前田 2018, p.124)。その結果、「音楽的に歌えなくても、音楽的に歌おうという意識」(同, p.125)や、「音楽的な強弱記号などわかりやすいものについて、よく気を付け、前もって努力する傾向」(同, p.126)が見られるようになり、「ピアノを練習することは、弾けることが目標でなく、その先の「表現する」ということが目的になっていった」ことが報告されている(同, p.126)。

多賀・千田(2020)は、小島(1998)および小島(2017)による「表現」と「表出」の整理をもとに、表現のプロセスを理解することの必要性について論じた(多賀・千田 2020, p.22)。ただし、ここでいうプロセスの「理解」とは、単に知識として表現のメカニズムを知っておくこととは次元が異なる。「理解」についてウィギンズ(Wiggins.G)は、「心的な概念構成であり、たくさんの個別的な知識の断片の意味を捉えるために、人の知性

が行う抽象化なのである」(ウィギンズ訳書 2012, p.43)と述べた上で、「特定のことを知っていたりできたりすることを示すことによって、その理解の証拠を提供できる」としている(同、下線は筆者)。つまり、「表現ができる」ことは「表現のプロセスを理解していること」であり、この前提に立てば、学生の表現力を向上させることが単なる技能の向上にとどまらず、指導者として幼児の表現を受容するために不可欠であると考えることができる。

5. 「分析することができる」

幼児を含む表現者は、五感を使って得たものから自らが感じたこと、考えたこと等を意識的に自分以外の人や物に対して伝えたいと考える。そして、その伝える行為こそが「表現」であるということが出来る。その行為について渡辺(2018)は、「外界と自己との相互作用により、自己の内面の理解も深まってくる。外界に向けて表現することは、生きること、心身ともに成長することの基本的な部分を担っている」(p.12)と人間が自己の存在価値を確認するために重要な存在であると主張している。また、宮下(2018)は、「幼児が表現したものについて指導者による受容や共感(評価)が得られると、それもまた経験となって再経験(新たな経験と表現)につながっていく」(p.260)と、自己の表現が受けとめられることによって新たな表現が生じる可能性を述べている。さらに、村上・三島(2017)は「子どもは、日々の保育の中で遊びと通して様々な表現の仕方を身につけていき、幼少期に培われた豊かな表現力は、生涯にわたって様々なヒトやモノへのかかわりの基盤となり、豊かな人間性の育みや充実した生き方を創造していく」(p.28)と、幼少期から「表現する」ことの重要性を示唆している。これらの先行研究から、人間の「表現」は豊かな人生を送るために必要不可欠な物であり、幼少期から様々な場所や環境に応じた表現方法や、自分以外の表現者による表現の受容を身につけ、育てていく必要があると考える。

しかし、幼児の表現は、日々の生活の中で繰り返される活動であり、意識して表現しているものではない。それだけに、幼児の表現を受け止め、何を伝えようとしているのか理解するためには、幼児が外界に向けてかかわりを持つまで、どのような過程を経たのかを知る必要がある。指導者には五感の働きや知能、感情の動きや人間関係など、人間の発達を支えている様々な発達要因を「分析する」力が求められるといえる。

6. 「より豊かな表現につなげていくことができる」

幼児の表現は、日常の遊びにおいていたるところで見ることができ、その表現活動は音楽表現や造形表現、身体表現と単純に分けることはできない。他の領域との関

連性が深く、相互にかかわりを持ちながら幼児の成長に影響を及ぼすことは多くの先行研究で述べられている。

一斉活動や自由遊びでは様々な活動や遊びが展開されているが、音楽表現を基本として豊かな表現に結びつけるには、どの様な点に配慮が必要だろうか。先行研究では「手作り楽器」活動に注目しているものが目に付いた。

木村(2019)は、保育者養成校通信教育課程における集中講義において、手づくり楽器製作を音楽づくりへ発展させる活動を行っている。そして、想像力を働かせて主体的に音を聴き、仲間と共有しながら表現をさらに進化させる活動が、指導者としての豊かな発想や、幼児を取り巻く環境に対する感性を高めたことを明らかにしている。小松原(2019)は、幼児が楽器や音源を自由に触ることができ、使用する音源を選択できるといった十分な音楽的環境を設定している園における自由遊びの様子を観察している。この条件下で起こり得る音の混在は音環境の悪化を招くが、指導者が優れた音楽表現によって介入することで新たな音環境を生み出す事例を挙げ、指導者が「聴かせる」のではなく、子どもたち自身が「聴くこと」を自発的に望む物的・人的環境を設定することが、「聴くこと」によって音楽表現力を高める構造に繋がっていく可能性があることを示唆している。さらに、松園(2017)は高等学校幼児教育選択コースの生徒や小学校教諭・幼稚園教諭対象の教員免許状更新講習の受講者にパンフルート作りの実践とアンケート調査を行っており、その結果から、楽器作りが学習意欲を高め、感受性や音楽的な耳を育て、達成感を得ることができ、音楽の原点に触れることによって文化の発展を理解することができることを明確にしている。さらに、楽器作りは様々な教科と関連性が高く、知性と感性をバランスよく育てる教材となり得るとしている。

身の周りにある様々な音を探し体験することで、幼児は多くの音に意味を見出し、自分の中に眠っている音楽の資質を認識していくことだろう。同様に、指導者自身も音楽の素材を意識して音を聴き、音を感じることができてこそ、指導者としての表現の幅を広げ、感性を高めることができ「豊かな表現」に繋げることができると言える。

7. 「展開させることができる」

音楽活動は幼児にとって受け入れやすいのと同時に表現しやすい活動であるということが出来る。しかし、「音」は見ることができないものであり形として残らないものであることから、音楽的な遊びについて、お互いの思いを共有したり言葉で言い表すことが難しい。これらのことから、幼児たちは様々なことに興味・関心をもって遊びに取り入れようとするが、幼児主体の活動として継続させるには様々な課題があり、この課題を乗り越えるためには指導者の援助が不可欠となる。

田澤 (2018) は、ピアノコンサートを聴いた幼児の「自分もコンサートをしたい」という願いから始まった実践例を挙げている。普段の生活とは違う刺激に出会ったことから生まれる興味・関心が、楽器作りやコンサートの開催につながり、幼児たちの生活を豊かにしたとして、保護者や地域とのコラボレーションの可能性を述べている。栗栖 (2020) はボディパーカッション指導の第一人者である山田俊之のボディパーカッションの有効性と、カール・オルフ (Orff, C, 1895-1982) のリズムを重視した音楽教育の理念から「リズムを使った身体表現が、子どもたちの音楽的な成長に大きな役割を果たす」(p.173) ことを踏まえ、日常的に手遊び等で身体と音を結び付けた活動を行っている幼児に対するボディパーカッションの実践を考察している。そして、その実践の中で幼児の「集中力」が養われたことや、動きやリズムの面白さを感じ取り、自分の身体を意識していたことに注目し、活動を継続することによって幼児の聴覚を育むこと。さらには表現の出発点となり、その後の器楽指導の第一歩となるであろうことに言及している。

上記のように、遊びを展開していく過程において、幼児は多様な発想をし、五感や身体全体を働かせて活動をする。そのため、指導者は遊びを通した総合的な指導を、様々な発達に必要な経験を相互に関連させながら行っていくことが必要になっていくだろう。

8. まとめ

第2章でも述べた通り、モデルカリキュラムにおいて学生が獲得を期待されている能力は、単に「イメージを豊か」にしたり、「表現ができ」るようになったりするだけではない。子どもの遊びを様々な形で展開できるように、読譜力やピアノ演奏といった「基礎技能」をベースとした「表現技術」と、幼児の発達や成長を理解する力をいわば両輪として学生に習得させることが求められるということである。その一方で、音楽理論や楽器の奏法、あるいは歌唱の技術といった習得に時間を要する資質能力が、実際の保育では必要とされているという事実もある。そのため、養成校においては幼児期の心身の発達段階と音楽の本質的な特徴を正しく学生に理解させ、これらが幼児の成長に及ぼす影響を専門的に考察し理解する能力、そして表現活動において、幼児の遊びの中で5領域がどのように関わりながら展開していくのか、それらの相互関係を構築できる能力を学生に担保する必要がある。そのために、学生自身が音楽、造形、身体、言語の各分野を、表現することの楽しさを実感しつつ学ぶこと、さらにそれらの特性や位置づけの理解を通して、学生自身が感性を豊かにし、表現力を向上できるような授業を養成校として組織することが重要となる。

【引用・参考文献】

- 石田敏明・橋本卓三 (2018) 「教育者・保育者養成課程における音楽理解力向上の試み—ブルグミュラーの作品を用いた表現活動を通して—」『北翔大学短期大学部紀要』56, pp.1-10.
- ウィギンズ, グラント・マクタイ, ジェイ (2012) 『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』西岡加名恵訳 日本標準.
- 木村文子 (2019) 「幼児の創造性を育む音楽表現の指導に関する一考察—保育者養成における「つくる」活動を通じて—」『幼年教育 WEB ジャーナル』2, pp.10-21.
- 栗栖由美子・藤井康子・永田誠 (2020) 「幼児の豊かな感性や表現する力を育む 領域「表現」に関する保育内容の検討」『大分大学教育学部研究紀要』41(2), pp.158-180.
- 小池順子 (2013) 「子どもの音楽表現におけるイメージの拡大と深化」『音楽学習研究』9, pp.13-24.
- 小松原祥子 (2019) 「幼稚園の自由遊びにおける「聴く」ことがもたらす 表現への影響—4・5歳児の観察による事例分析—」『保育を考える研究会研究紀要』1
- 多賀秀紀・千田恭子 (2020) 「幼稚園教員養成カリキュラムにおける「表現」の内容検討(1)—感性と表現との関わりを中心に—」『とやま発達福祉学年報』11, pp.19-28.
- 田澤里喜 (2018) 「あそびの中で子どもは育つ」(株) 世界文化社, pp.84-91.
- 長澤希 (2018) 「領域「表現」にかかわる幼児期の音楽表現及び音楽的発達の特質」『領域「表現」「言葉」の内容と指導法』広島文教女子大学, pp.55-64.
- 平尾憲嗣・滝沢ほだか (2019) 「保育者養成における音楽を用いた表現領域の学びについて—情景を想像する視点に着目して—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要』51, pp.71-78.
- 保育教諭養成課程研究会 (2017) 『平成 28 年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究』
- <https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm> (2020/08/20 確認).
- 前田菜月 (2018) 「ピアノ演奏の音楽的表現力向上における実践—「歌う」学習を取り入れて—」『目白大学高等教育研究』24, pp.121-127.
- 松園洋二 (2017) 「楽器作りから見えてくるもの—パンフルートづくりの実践を通して—」『平安女学院大学研究年報』17, pp.40-58.
- 村上玲子・三島瑞穂 (2017) 「保育者養成校における教科目「保育表現技術」の捉え方と課題—音楽担当者の立場からの考察—」『宇部フロンティア大学短期大学部紀要』53 (1), pp.21-31.

幼稚園教員養成カリキュラムにおける「表現」の内容検討(2)

劉麟玉・宮下俊也・宇田秀士・横山真貴子(2018)「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(5)－「表現」に関わる教育内容研究知見に依拠して－」『次世代教員養成センター研究紀要』4, pp.259-265.

渡辺厚美(2018)「幼児教育における音楽」『音楽表現, コンパクト版 保育内容シリーズ⑤』(株)一藝社, pp.9-16.

和田朝美・米澤美紀・佐藤映(2016)「絵本のイメージとピアノ即興表現(その1)－豊かな表現力・感性を育むために－」『羽陽学園短期大学紀要』10(2), pp.155-168.

(2020年8月21日受付)

(2020年9月30日受理)

